

平成二十四年(二〇二二年)九月三十日 慰霊の言葉

神から人へ、人から神へ。

人の流せし涙も汗も、全ては後の栄えのための、尊き種なり、縁なり。

無駄なるものは一切なく、全てが次の命へ続かむ。

そこに咲ける草花は、犠牲となりし人皆の、この世に残せし家族らへの、愛を形となせしもの。

残りし家族の 目を和ませ、心安らげ、慰むるため。

体は亡び、消えようとも、愛は残りて、さらに強まり。

一人ひとりの思いは集まり、己を偲ぶ家族を案じ、この世に愛を届けむと 形のあるに 託せしを。

なれば生ける者たちは、そこに宿れる想いを汲みて、胸奥深き悲しみを、死せる御魂と共に癒せよ。

この世とあの世に境はなし。

御魂の底に流れる愛は、彼岸此岸の境を超えむ。

この世を見おろし、煩惱に、苦しむ家族を救わむと、あの世にありても 穏やかならず。

なれば、生ける者たちは、死せる御魂を煩わせず、あの世の行を果たせるように、言葉持ちて、慰めよ。

今ある生を感謝して、犠牲となられしことを尊び、この世の行を全うせむと、心も高く、御魂に誓えよ。

犠牲と捧げし命の重さを、しかと受け止め、勇気に変えよ。

あの世に帰るその日まで、この世の行をよく果たし、誇りを胸に戻れるように、一瞬たりとも怠けるなかれ。

この世で働くその姿こそ、死せる御魂を慰むれ。

常に感謝の想いを伝えよ。

ほほ笑み浮かべて 語りかくべし。

生きても死にても共にあるを、心に深く思い描けよ。

祈りの思いの届きなば、御魂の力も増しゆきて、生ける者への守護をば強めむ。

悲しみ嘆くも今日にて終わり、共に神の愛に守られ、光に包まる世界を思えよ。

明日への一步を踏み出せよ。

生けるも 死せるも 手を携えて、離れ離れになることはなし。

彼岸此岸をつなぐのは、ただ言霊と想いのみなれ、祈りに込めよ、言霊を。

安らぎ癒しの言霊を。

愛と光の言霊を。

感謝と希望の言霊を。

神を讃える言霊を。

命言祝ぐ言霊を。

心清める言霊を。

ただひたすらに 守られゆかむ。

憂いも悩みも煩いも、全ては浄化し、解き放たれむ。

御魂に幸あれ、生けるも死すも。

神の栄光、共に頂け。

神の誉を 共に賜れ。

神の光に 共に浴せよ。

神のおはさぬ世界なければ、人は神と一体なり。弱き心を消しゆけよ。

やこい。